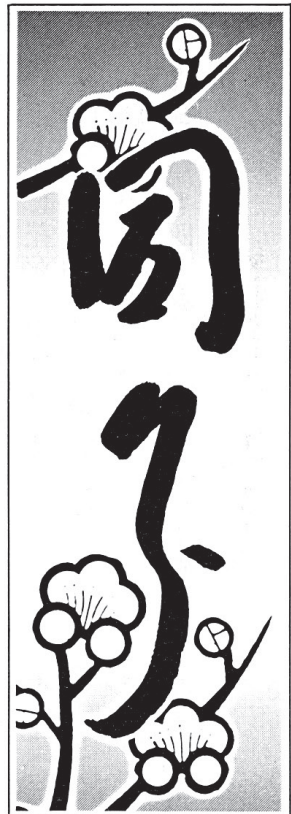




平成 4 年度県奉詠大会

秋田県梅花流奉詠大会は、8月28日、合川町町民体育館を会場にして62講 1,084名が参加して県北地区の大会が開催された。

中央・県南地区の大会は、大内町農業環境改善センターを会場にして26講 690名が参加して、盛大に開催された。



講員一泊研修会



オイシカッタ 精進料理

第12回講員一泊研修会は、11月4日・5日、大館市・宗福寺を会場に開かれた。

また第13回は11月10日・11日の両日、藤里町・宝昌寺を会場に開かれた。

清香薫る

平成四年は、梅花流が生まれて四十年の記念の年でした。県内でも約五、〇〇〇人が梅花の花を咲かせるようになりました。

平成 5年 3月 4日
第 7 号

題 字 大館市宗福寺住職 加藤信三老師御染筆
発行所 北秋田郡森吉町本城 浄福寺内 秋田県梅花流師範会事務局
発行者 亀谷健樹
編集者 (広報部) 柴田弘一・保坂春穂
印刷所 秋田県北秋田郡森吉町米内沢 武石印刷 ☎0186-72-3319

ハワイの空に秋田の梅花が流れる

レイをかけての奉詠 8月30日・ホノルル・ハワイ別院



ハワイ梅花講35周年大会に「心のハーモニー」(烏合衆) 献詠

《40年》 梅花の歩み あゆみ

梅花主事 清水忠道

昨年（こぞ）の四十周年記念全国大会の大会会長のお言葉（ことば）の中に、次のようにあった。

「道元（どうげん）禪師（ぜんし）様（さま）は、梅華（ばいげ）の巻（まき）において、梅は春（はる）に先（さき）んじてたちまち一輪（りん）二輪（にりん）の花（はな）を開き、三輪（さんりん）四輪（しりん）五輪（ごりん）と数（かず）えきれない花（はな）をつける。その花（はな）の清（きよ）らかさを誇（ほこ）ることがなく、その花（はな）の香（か）りを誇（ほこ）ることもない……」と。

更（さら）に言葉（ことば）は続（つづ）きました。

「最も（もっとも）素晴（すばら）しいのは、梅花（ばいげ）が世界（せかい）に春（はる）を招（まね）き、草木（くさき）を芽吹（めぶ）かせることである。すなわち一輪（りん）の梅（うめ）の花（はな）にたとえられる講員（こういん）みなさんの功徳（くどく）が、世界（せかい）に平和（へいわ）の春（はる）を招（まね）くものとおさとしなのであります。梅花流（ばいげりゅう）の命名（めいめい）には、この使命（しめい）と深い宗教（しゅうきょう）的（てき）境涯（きやうがい）が込（こ）められているのであります」とありました。

このように素晴（すばら）しく、そして奥深（おくふか）い梅花（ばいげ）の花（はな）がいよいよ広（ひろ）がり、地域（ちいき）社会（しゃかい）や家庭（かてい）の中に、至（いた）る処（ところ）に花（はな）を咲（さ）かせるように。そして人々（ひとびと）の心（こころ）の中に安（やす）らぎを与（たま）えてくれるようにと念（ねん）じております。

さて梅花流（ばいげりゅう）も四十歳（としじゅう）年頃（ねんころ）いよいよ働き盛り（さか）り、分別（ぶんべつ）盛り（さか）り、使命（しめい）は重大（じゅうじょうたい）だ。そこで梅花（ばいげ）の成長（せいちょう）を少し紹（しょう）介（かい）します。

◎昭和二十七年、梅花流（ばいげりゅう）正法（しょうぼう）教会（きょうかい）としてスタート。

県内（けんない）でも昭和二十八年（じゅうはちじゅうにゅうねん）頃（ころ）より梅花（ばいげ）が始（はじ）まる。昭和三十年（じゅうしゅうねん）頃（ころ）よりは、県北（けんきた）地区（ちく）（大館（おほのく）北（きた）秋田（あきた）、鹿角（しかかく））や県南（けんなん）地区（ちく）（本荘（ほんじょう）、由利（ゆり））等で、講習（こうしゅう）会（かい）や検定（けんてい）会（かい）、奉詠（ほうえい）大会（たいかい）等（ら）も開（ひら）かれるようになってくる。森吉（もりきち）町（まち）龍淵（りゅうえん）寺（じ）には昭和三十一年（じゅうしゅういちねん）の奉詠（ほうえい）大会（たいかい）参加（さんか）表状（ひょうじょう）が保（たも）たれております（全（ぜん）県（けん）規（き）模（も）は昭和三十一年（じゅうしゅういちねん）以降（いこう））。

◎昭和三十四年（じゅうしゅうしよねん）六月（じゅうごく）九日（くにち）、正法（しょうぼう）教会（きょうかい）秋田（あきた）県（けん）支部（しぶ）結成（けつせい）協（きょう）議（ぎ）会（かい）開（ひら）催（さい）、会場（かいじやう）鷹（たか）巣（す）町（まち）宝勝（ほうしょう）寺（じ）。

◎同年（どうねん）十一月（じゅういちがつ）二日（にち）、正法（しょうぼう）教会（きょうかい）秋田（あきた）県（けん）連（れん）合（がっ）会（かい）発（はつ）足（そく）。支（し）部（ぶ）長（ちやう）八（はち）名（な）、二十（にじゅう）支（し）部（ぶ）（講（こう））

◎昭和三十五年（じゅうしゅうごねん）四月（しがつ）二十五日（にじゅうごにち）、第一（だいいち）回（かい）秋田（あきた）県（けん）奉詠（ほうえい）大会（たいかい）開（ひら）催（さい）。会場（かいじやう）秋田（あきた）市（し）歎（なげ）喜（き）寺（じ）。

◎「同行（どうぎやう）」第五（ご）号（ごう）六（ろく）七（しち）ペー（ページ）ジ（ジ）に記（き）載（さい）。

◎昭和三十六年（じゅうしゅうろくにん）四月（しがつ）四日（よにち）、創立（せつりゅう）十（じゅう）周年（しゅうねん）記（き）念（ねん）全国（ぜんこく）大会（たいかい）に、秋田（あきた）県（けん）支（し）部（ぶ）として初（はつ）参加（さんか）。

他（た）県（けん）との合同（ごうどう）登壇（とうだん）奉詠（ほうえい）と記（き）されてる。糸（いと）乱（らん）れぬ見（み）事（こと）な奉詠（ほうえい）と記（き）されてる。

◎昭和三十七年（じゅうしゅうしちねん）八月（はちがつ）二日（にち）、名称（めいじやう）を「曹洞（そうとう）宗（しゅう）梅花（ばいげ）講（こう）」と改（か）める。

秋田（あきた）県（けん）の梅花（ばいげ）も、支（し）部（ぶ）発（はつ）足（そく）から三十五（さんじゅうご）年（ねん）、早（はや）い講（こう）では三十八（さんじゅうはち）九（きゅう）年（ねん）の歴史（れきし）となります。講（こう）も百（ひゃく）二十（にじゅう）二（に）ヶ（ヶ）寺（じ）、五（ご）千（せん）六（ろく）百（ひゃく）名（な）と（な）りま（な）した。この梅花（ばいげ）が県内（けんない）全（ぜん）域（いき）に咲（さ）き揃（そろ）うよう願（ねが）って（お）ります。（文責（ぶんせき）編（へん）集（しゅう）部（ぶ））

講長アンケート

リポート

師範（しはん）会（かい）では昨年（こぞ）夏（なつ）に、県内（けんない）の梅花（ばいげ）講（こう）長（ちやう）百（ひゃく）十八（じゅうはち）名（な）に（たい）して、講（こう）運（うん）営（えい）や検定（けんてい）会（かい）そ（そ）の他（た）梅花（ばいげ）の諸（しよ）問（もん）題（だい）に（たい）してアンケ（アンケート）ー（てい）ト（ト）や御（ご）意（い）見（けん）を頂（いただき）ま（な）した。

アンケート結果（其の1）

◎一（いち）八（はち）講（こう）中（ちゆう） 回（かい）答（た）寺（じ）院（いん）六（ろく）十七（じち）講（こう）
（回（かい）収（しゆう）率（りつ）五（ご）十七（じち）%）

【講員の指導者】

☆講（こう）長（ちやう） 十八（じゅうはち）講（こう）

☆寺（じ）族（ぞく） 十八（じゅうはち）講（こう）

☆副（ふ）住（じゆう）職（しやく） 五（ご）講（こう）

☆他（た）講（こう）師（し）範（はん） 二十（にじゅう）八（はち）講（こう）

※一（いち）講（こう）で重（じゆう）複（ふく）して（お）る所（ところ）と無（む）回（かい）答（た）も（も）あり。

【例会は（月）】

☆一（いち）回（かい） 十四（じゅうし）講（こう）

☆二（に）回（かい） 三十二（さんじに）講（こう）

☆三（さん）回（かい） 十四（じゅうし）講（こう）

☆四（し）回（かい） 六（ろく）講（こう）

☆其（その）他（た） 一（いち）講（こう）

【練習時間の区分】

☆午（ご）前（ぜん） 七（しち）講（こう）

☆午（ご）後（ご） 三十八（さんじゅうはち）講（こう）

☆夜（よ） 三十四（さんじゅうし）講（こう）

☆一（いち）日（にち）中（ちゆう） 四（し）講（こう）

※一（いち）講（こう）で重（じゆう）複（ふく）して（お）る所（ところ）あり。

【練習時間（一回）】

☆一（いち）時（じ）間（かん）半（はん） 一（いち）講（こう）

☆二（に）時（じ）間（かん） 三十一（さんじゅういち）講（こう）

特派巡回報告

「勉強ナリマシタ」

新潟県・福島県巡回

昨年六月に、新潟第四宗務所管内を六会場、福島県南部を十一会場巡回させて頂きました。

最初の新潟県一週間だけで、実は肉体的にも精神的にも大変疲れました。秋田県に來られる特派の先生は、十八会場を休みなく巡回しなければいけないので、正に殺人的なスケジュールだなどと、初めて想いを致した次第です。

日常生活から長い間離れるということがこれ程人を不安にするとは、思いもよらないことでした。健康管理にしても精神的充実を維持するにも、基本的には自分がヤルということを変更して修行させられました。

梅花特派では、声が出ないのが一番困るので、風邪をひかない様に、声をつぶさない様にと祈る気持ちで居りましたが、福島県での六日目頃から、声がかすれてきてしまいました。それで、講習中はできるだけ煎茶を飲まない様にしたり、夜は、日本酒を多く飲んでみたりしましたが、九日目の朝起きてみると、いつもより低音が出なく

なっていました。というより声が響かないといった方がいいかもしれません。その日は悪い事に「明星」の講習が待っていましたので、起き立てに蒲団の上で何度も「あのほし」を練習しました。そうしているうち突然、解りました。声の出し方が悪かったのです。もつとおなかに力を入れて、上半身をリラックスさせて唱えなければいけないと思いました。

振り返ってみると、普段は少人数を相手



市 庄 英 俊
寺 林 間
本 恵 本

にしているのです、大きい声で唱える事が少なかった様です。その為頭では良い声を出す様にと考えていても、実際は口先だけのお唱えでしかなかったのです。我々の練習でも、できるだけ大きい声でお唱えしてみる事も、必要な気がします。

今回の特派では、三曲奉詠禁止の問題もあり、梅花流の在り方について、深く考えさせられました。私自身歌詞について深く考える事もなく、曲のすばらしさのみに感動して居りました。しかし、歌詞の意味が

- ☆二時間半 六講
- ☆三時間 十七講
- ☆三時間半 二講
- ☆四時間 三講
- ※無回答講あり。

【指導方法】

- ☆二部制 十五講
- ☆三部制 四講
- ☆分かれていない 四十五講
- ※無回答講あり。

【検定期日】

- ☆今まで通りでよい 四十九講
- ☆五月 二講 六月 一講
- ☆七月 一講 九月 三講
- ☆十月 二講 十一月 四講
- ※無回答講あり。

【検定会の時間】

- ☆今まで通りでよい 五十五講
- ※外は無回答。

回答を下さいました皆さまに感謝申し上げます。次回は検定会についての御意見を報告します。

解っている方が、法悦の重みも違ってきます。これからは、頭も使わなければいけなくなつた様で、増々大変になります。これで行く、身口意の三業でお唱えする事になりました。

正しい所作で、正しくお唱えをし、その内容が正しいものならば、安心して全身全霊を傾けた詠唱ができることでしょう。

シリーズ おらほの梅花講

じねん ちょう 寺年長

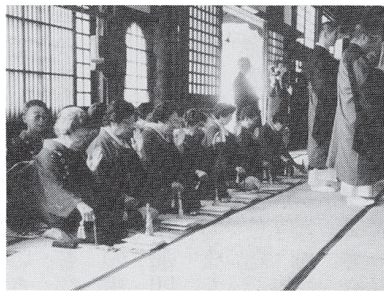
住所 鹿角市花輪
（十一教区）
設立 昭和三十六年四月
講長 松井直行
講員数 二十六名

さわやかに晴れあがった秋空、心地よい風を受けながら山門の奥の平和観音像に礼拝し、向い側のお地藏様に手を合わせ、今日一日の無事を祈りながら急ぎます。早くおいでの先輩の方々の笑顔に「おはようございませう」「今日もどうぞよろしく」とご挨拶。和気あいあいの中に法具を開くと不思議なくらい自然に背筋がのび、心身共にピリツとして来ます。

長い務めにピリオドを打ち、公私共にお世話になった御住職様と奥様にご挨拶に伺いました所「梅花講に入っは」とお誘いを受けました。今までは、御詠歌を聞いたり見たりする機会もほとんどなく、憶えられるのだろうかなどと不安でしたが、何か心の支えになるものを欲しいと思っておりましたのであまり抵抗もなく、さっそく仲間に入れていただきました。

講員は二十五名、月に二回、一日と十六日が練習日でこの日は十時から三時までと

式山晋 平成4年9月13日



いうことでした。講の皆様は一つ一つ丁寧に、わからない所はフイードバックをしなからとても親切に教えて下さいました。何回練習しても気をつけて唱えたつもりでも自己流になってしまったり、難しくて教典の文字が見えなくなる時も度々ありました。投げだしたくなるような気持ちの私に、皆様に助けられ励ましていただきながら、なんとか今日までがんばって来ました。

そして、今まで考えても見なかった世界があつたんだという驚きや、そこで学ぶ多くの方々は、心の修養を積み重ねられ、日常の生活の中に生かしておられるのだということに、深い感銘を受けました。

毎年の全国大会にも、都合のつく限り参加してきました。奉詠の後の各地の旅行も楽しみで、さまざまなすばらしい文化にふれることができま

した。

お寺様には、お正月、お盆、春秋のお彼岸等と色々な行事があり私達も参加させていだいておりますが昨年九月十三日の退董晋山結制法要

じげん とう 寺源東

住所 仙北郡田沢湖町生保
内（八教区）
設立 昭和六十年九月
講長 森沢建亮
講員数 十七名

が行われた時は、講員一同で御詠歌を唱えさせていただきました。厳かで立派な式典に参列し感激も一入でした。

退職したら何かにつけて淋しいだろうと思っていたのに、こんなに有意義で楽しい人と人の和と輪があるなんて――。

「いまおがむ 天地いっぱい ただ拝む」私の好きな言葉ですが、これからの素敵な人生を送るためにも、自分の出来る範囲内で皆様の後について勉強を続けていきたいと思っております。

紹介者 講員 阿部トシ

山と湖と湿泉の町田沢湖町。特にレンゲつつじの群生地知られている生保内公園の麓に生保内東源寺があります。東源寺梅花講は発足してからまだ日が浅く、皆様に紹介するのはお恥しい程の、ささやかな講であります。

梅花講の前には地元の念仏講と共に真言宗密厳流の御詠歌の会が長く続いておりました。今も明治最後の気丈なお婆さん達が活躍しております。

私も長男に逝かれ、心の救いを求めている時、先輩の勧めで講に入れて頂き、仏様のお慈悲にすがる思いで御詠歌を習い始めました。

田沢湖高原 金色大観音



ある時東源寺の方丈さんが「曹洞宗にも梅花講と云う御詠歌の会がありますヨ。仙北にはあまりないから、どうせやるなら自分の宗門に入ったら」と申されました。この事を若輩でありました

が皆さんにお話ししたら、快く方丈さんの勧めに賛成されて昭和六十年の秋から梅花講を始めました。

習う程に難しく、四苦八苦しましたけれども、検定六回まで挑戦し張切っております。

私達は、お葬式などに招かれ念仏や御詠歌をお唱えさせて頂いておりますが、この梅花講の無常、追弔、追善の御和讃は、御遺族の感銘深く心から「ありがとうございます」とお礼を云われております。又、毎月一回練習会を開き横の連絡を取りながら楽しく励んでおります

田沢湖高原の高野山金色大観音にも、花祭りや観音の日に招かれて奉詠します。山々にこだまする御詠歌に、本当に身も心も浄められて、梅花講に入った幸せをしみじみ感じさせられます。

高泉寺の泉田先生には、遠い所を長年御指導下さいまして、深く感謝申し上げます。年毎に難しくなる御詠歌に、止めようかと

思った事もありました。でも先生の熱心な御指導に、生きがいを感じ、一つの社会参加であると信じ、又こうした修行が今よく言われるボケ防止ともなればと、老身にむち打ってお互いに励まし合い頑張っております。この喜びを若い人達にも伝え、ますます講を盛んにしたいものと念じております。紹介者 講員 高橋利子

じょう 興昌寺

住所 由利郡大内町高尾 (第四教区)
設立 (本庁届出) 昭和五十七年四月
講員数 百四十八名

本庁への講設置届は昭和五十七年と、ごく最近であります。当講の歴史は昭和三十年までさかのぼります。

昭和二十八年、私が大本山永平寺安居中の時の中村維那老師から手ほどきを受け、昭和三十年任職拜命と共にグループを育成したのがはじまりであります。

詠道研さんの究極の目的が、個々人の信心を高めることにあるとしても、教化の上では地域社会の中で生活文化の領域に定着させることも大事な要素であります。

この視点に立つ当講の特色は、限らない底辺の拡大と地域社会での奉詠の生活化であります。

このことから、ひたすら組織強化に当たってきたことが、本庁登録を意図的に遅らせてきたゆえんでもあります。

水かけ地蔵尊大祭



そのために「寺に來い」ではなく「出向いて掘り起す」体制づくり、即ち部落ごとに練習日を固定して月六会場に講員が出向いて指導する講運営が大いな特徴といえましょう。

また生活化にあつては、県内いずれも同じように正しい指導もされない、いわゆる「お念佛」を、三十数年の月日をかけ、詠讚歌に切り替え得たこと。個人宅のいかなる仏事法要にも必ず詠讚歌が流れる現実が、その証左であります。

一方、わが講員は、いまや二千名を超える参詣者でにぎあい、本町最大の祭りとなった「水かけ地蔵尊大祭」の文字通りの実践部隊であります。彼女らが真心こめて手づくりする「うちわ餅」は、いくら作ってもすぐ売り切れとなる名物となって地域の夏の風物詩を創出してあります。

幸い三世代目の百四十八名が、全て中教導(水色房)に進級したいま、このあとに続く二十〜三十代の講員の養成がわが講の課題であります。近い機会の奉詠大会には、初初しい若手講員だけの奉詠登壇をご披露したいものと考えております。

紹介者 講員 大坂高昭

私の梅花流

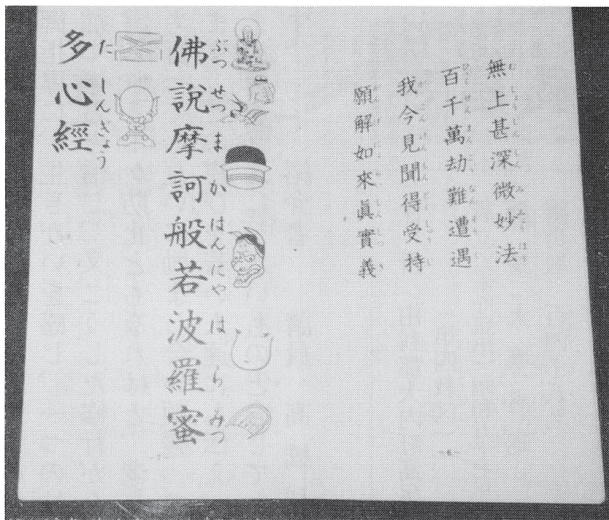
なんぎ した はなし

はじめはカタカナ・ひらがな梅花

私が梅花流をはじめた頃の昭和三十五年は、いわゆる六十年安保で日本中騒然として正に革命前夜を思わせるものがあつた。秋田の農家では耕耘機が入りはじめ、三早栽培を盛んに奨励しておつた頃でもある。私は未だ三十歳にならぬ若い住職であつた。農村では新しい事に目を向け、お寺の事等にはあまり関心もないように、年末には檀家の年回法事が五十余りも残つて、遂にはお寺で呼び掛けて合同の法事を行ったこともあつた。

宗教界も新興宗教が盛んになり、あちこちの家に勧誘がなされ、或るお寺にまで勧めに行つたという大変な時でもあつた。お坊さんの年一回の現職研修会で梅花講に誘われた私は、ちよつと大袈裟かも知れないが、梅花流に命運

をかけるつもりで詠讚歌をはじめたのである。先づ、テープレコーダーを求め、ガリバン刷りの教典を作り、寺詣りの時から皆に勧めた。当時の田舎では冬の間農家の子女は、みぞ縄をなつて一日四・五十円位の内職をしており、鈴鉦一式六百五十円ではすぐ買うことはできません。教典も百円以上でしたので、緑色の表紙で三十円の普及版の教典を買うことにした。内容は三宝、正法、修証義、紫雲のみのものであつた。戦前の小学一年生は、カタカナから習い、二年生でひらがなを習つたものである。農



え 心 經

作業や家業の手伝いのため遅刻、早引き、欠席は大目に見られ、下の弟や妹をつれて学校へ来ておつた。明治、大正の尋常小学校は四年までで、家が貧しく学校へゆけない子どもも沢山おつた。或る日の午後、隣りの聚落のおばあさんが来て「和さんおれのどご貧乏で学校さろぐだ行げねもだがら、ひらがなおぼえねでしましたもで、なんとがカナコ振つてタエン」と言つて来た。大難儀して、小さなひらがな、なるべく大きなカタカナを振つてよいうやくできた時はすでに暗くなつておつた。このばあさんと一緒に夕飯を食べて帰つてもらったこともあつた。又、カタカナさえも読めない方もあつて、息子さんと一緒に習い始め、家でまたばあさんが習い、丸暗記で憶えた方が、鈴鉦を用意してから、一人だけ真つ直ぐを見ておると目立ちすぎるので本を見てお唱え下さい」と注意したこともあつた。こんな熱心な方々に支えられて我が講は花を咲かせるようになった。



普及版教典

昔は各聚落ごとに上念仏講、下念仏講があり、お唱えがそれぞれ少しづつ違ったりしておった。どちらの方が本当か等と相談を受けたこともあった。手作りの小さな帳面があり、字が読めないのに絵が書いてある。また字の書ける人は聞き写しでカナで書いてあるものもある。絵の方は、絵心経の要領である。釜の絵を逆に書いて摩訶と読ませ般若の面を般若、お腹を波羅と読み、箕を書いて蜜、田圃の絵を多と読み、神社

投稿

鈴鉦のひびき



田沢湖町田沢寺

講員 堀川はつみ

平成元年九月、横浜の東泉寺様から
鈴の音と 共に去り行く堀川の

流れは続く 皆の心に

と言う、ありがたい歌に送られ、四十年前に住んだ事のある夫の故郷に移り来て早や三年の年月が経ちました。

土地の方々とは、何の苦勞もなく打ちとけることが出来ましたが、楽しみにして参りました詠讚歌を知らない人が多く、とても淋しいことでした。

どうにか出来ないものか、と菩提寺の田

の鏡の絵の右上に二つ点を打って心経(神鏡)と読ませるのである。「ミーチノハーダノ六ジンゾ導キ玉エヤナミアミダー」、何を書いても下に「ナミアミダー」と書いてある。その中の「ジーオージツタイナミアミダー」とはどう言うことかと言う相談である。分らるので古尊宿さまに聞いたら「ジーオージツタイ」は「十王十体」のことで閻魔さまのことであると言う。三十歳前の私は、この念仏を檀家さんに唱えさせ

沢寺方丈様にご相談申し上げました所「仲々容易な事ではないと思うが、どうぞやってみて下さい」とのお言葉。

いつの日か、このきれいな本堂から、梅花のお唱えと、鈴鉦の音を響かせれる希望が沸き、嬉しさで一杯でございました。

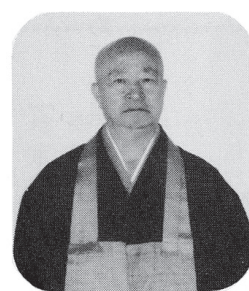
ご縁とは不思議なもの。何気なく見せていただいた「心のハーモニ」のパンフレット。その中の写真を見て、この方に梅花の指導をいただけなものか、と思い定め、

図々しくも柴田先生にお願いのお電話を差し上げました所、「毎月十九日、土崎の蒼竜寺様で梅花の練習をやっているのです、お寺にお願いして来てみて下さい」との事。

喜び勇んで田沢湖町から土崎まで通いつづけて丸二年になりました。

おかげさまで、平成三年二月、念願の講

て置くことはできなかつた。止めたがらない念仏を休止させて、鈴鉦を用意させ、その後正式の本を求めさせるに数年を費したのである。



丹生純雄

雄和町
相川寺住職

設置の認可が下りました。うれしい限りでございませう。

はじめは五人、今は九人に増え、本堂から詠讚歌の歌声をひびかせております。

白いブラウスに輪絡子といった姿で、懸命に鈴と鉦とを鳴らし、ヨチヨチ歩き乍らも楽しく詠讚歌を学べる幸せにひたつておる昨今です。

身をけずり 人につくさんすりこぎの
その味知れる 人ぞとうとし
残り少ない人生を少しなりとも他のお役に立ちたく、

毎日を合掌の日暮らしにしたいものと願っております。



こころをよむ (六)

同行御詠歌（道文）

うれしくも釈迦の御法にあふひ草
かけてもほかの道は踏まめや踏まめや

「同行ご詠歌？ご和讃だば、大会どがでお唱えするがら解るどもナ、ご詠歌だばまず見るごどネーナー」と御言る方が案外多いのではないのでしょうか。そうして見ると、梅花八十曲程ある中でも馴染みの薄い曲と云えましょう。

でも、改めてこの曲を味わって見ますと私共「仏の御子」達に、これ程強く「生きる方向付け」を示している曲はないと言つてよいでしょう。

アナタ ナニ シンジテマスカ

ある本の対談で外人が日本人を「掴まえる所のない民族」と書き、更に独特のユーモアで「年末から年始にかけての変わり身の速さ」とありました。皆様は一体何を想像なさいますか？、それは「ジングルベルでキリスト教に、除夜の鐘では仏教に、初詣では神道に」でした。

確かに団体旅行等でも、お寺に行つては手を合わせ、神社を見ては拍手を打つ。日本人の感覚からすると、日常茶飯事な様ですが、神様が絶対の外人の目には、あちらにフラリ、こちらにフラリの日本人の姿は異様としか写らず、一体何を心の拠り所としているのか信じ難いというのです。

日本人の心の広さの精でしょうか。或いは生活文化の違いのなせる業でしょうか。いずれ、グサリと来るものがありませんか。さてそこで、私達の「一仏両祖」様はどの様に教えて下さっているのでしょうか。

「この曲は私にとって命です」

作曲された故児玉健司先生の指導を頂く縁があった。そのご苦労話の中で「あふひ草は植える物忘れをしないとの云い伝えと、様子がそよ吹く風にも身をしなわせる程人の心に似たか弱い草だが、花はまるで心を持つ如く、常にひたむきに太陽の方に身を傾けている。又、**「かけて」とは神かけての語がある様に『いささかも』や『かりそめにも』の意味です。**」
「でも、一番大切なのは字余りの様な繰り返し『踏まめや』ここなんです」と力説



しておられた様子が今も目に浮かびます。

同事 同法 同証 同行

以上通釈すると、こうなりましょうか。「私達は今、お釈迦様の尊いみ教えに値いする事が出来ました。この喜びは何物にも勝るものです。今後あおい草が懸命に太陽に心を向ける様、み教え一筋生きて参ります。かりそめにも、ほかの道に踏み入る事があって良いものでしょうか。いいえ決してわき道に踏み入りません」。

つまりこの曲は、尊いみ教えとの出会いに感謝し、梅花講の皆様は勿論のこと仏教徒一人一人が、切角の人生、ひたむきにその教えを実践して参りましょうとの熱い誓いのご詠歌と云えましよう。

そして、その切なる願いを込めてお届けしているのが、この会報の名前「同行」なのです。

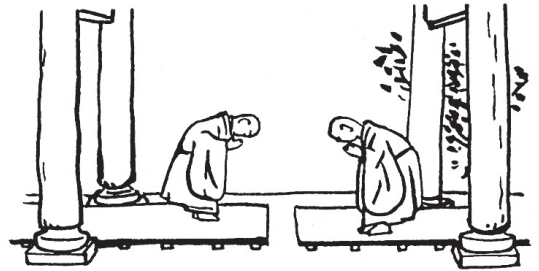


鹿角市 恩徳寺副住職 岩館 祖芳

「チョットぶじょうほう」

ありがたい合掌を

亀谷健樹



よそのお寺の、大きな法要などに随喜すると、私はよく梅花講の皆さんの詠唱をお聴きする。そして「ああお上手だな」「声がよく透るな」などと感心する。だがそれよりも、正直なところ一番関心があるのは坐行のたたずまいである。もつとはつきり云うと、合掌の姿にそのお寺の講員さんの信心のふかさを汲みとる。

合掌が、両手をすつきり伸ばした、心のもつた形の人には、文句なしに敬服する。それが胸元に低く、何となく両手を合わすだけ、もつそりとふくらましているだけではがっかりする。

梅花の検定の時などで、片手合掌をするが、正式に教えられた通りの形になっている人は、ごくまれである。

どうしてももつと心のこもった、見るからに崇高な合掌が出来ないものか、いつも思う。「眼は心の窓」というが、合掌は、その人の心の形をあらわす。つまり佛性そのものを表わす、といってよいだろう。さて、合掌には五つの功德があるといわれる。

- 一、無我けんそんになる
- 二、心が清く、澄みきってくる
- 三、心がひきしまってくる
- 四、心がひろびろとなる
- 五、ほとけになりきる

また、右ほとけ、左はわれと合わす手の中ぞゆかしき南無のひとこえ」という道歌がある。

要するに合掌によって《泥中の白蓮華》のように、煩惱のちりあくたにまみれた自分自身の内に、佛心が見事に目覚め、花ひらくのだ。

私の母は生前、大変熱心に観音さまを信心していた。毎朝、奥の間の揚柳観音さまの前にぬかづき、ふかぶかと合掌礼拝していた。その後ろ姿は今も私の心に灼きついている。私は真の信心を教えられた。

梅花の場合、合掌に始まり、合掌に終ることを銘記したい。それほど大事なのに、私達はどうもおろそかにして形式的になりやすい。そうならないために、より一層心の修養を積み重ねばならぬ。それは一朝一夕で出来るものではない。毎日お佛壇に向って拝むのが大事であるが、拝む時の心はどうなのか、なにをどのように拝むのか、要するに合掌礼拝の自身が問われるのだ。

そのことはやはり、機会あるごとに菩提寺の方丈さまや、研修会の講師などについて、佛教をくりかえし聞法する心構えが肝要であろう。いうなれば、詠唱やお作法だけでなく、もつと内面的なものについてもおべんきようしてほしい。

禅のことば《行解相應》とは、この大切さを説いている。



「梅花にまなぶ」

定価 五〇〇円（税込）

○御詠歌、御和讃の意味と心がわかります。
○お求めは、各お寺を通して宗務庁へ。

検定 Q & A

- 問** 特設検定会とは
答 宗務庁に申請して認可を受けて開く。秋田県の場合は、宗務所主催で昨年は県南中央、県北の3会場で開催した。
- 受験できる階 { 僧侶、助教 ~ 4級師範まで
 寺族、補教 ~ 4級詠範まで
 一般、教導 ~ 3級教範まで
- 問** 地方検定とは
答 宗務所または、各講が随時開催できる検定会をいう。
- 受検できる階 { 寺族、補教 ~ 詠範補まで
 一般、教導 ~ 中教導まで
- 問** 特設検定で合格した人の申請日は
答 秋田県では、9月8日の日付けで申請します。
 3級教範のみ10月10日です。
- 問** 講員登録日は
答 申請し、宗務庁の講員台帳に登録された日となります。各自の申請した日とはちがいますので御了解ください。
- 問** 未登録ですが検定を受けたいのですが
答 講員章を受けてからが望ましいけれども検定日9月8日が登録日となります。

歓迎

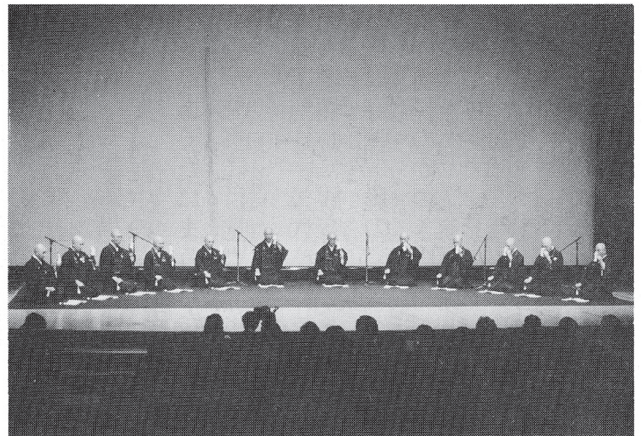
禅センターの

梅花講習会

- 毎月第一土曜日 十時半〜三時まで
 - 参加自由 (どなたでも結構です)
 - 会費 無料
 - 講師 管内師範 その他
 - 昼食持参
- 場所 秋田市泉三嶽根一五一八
 (平和公園入口 左側)
- 電話 ○一八八一六八一六八七一

詠讃歌と尺八の出会い 心のハーモニー (五)

平成4年11月23日、秋田市アトリオン音楽ホール



詠讃歌の原点、梅花流のみなもと「^{しょうみょう}声明」を取り上げました。



編集後記



☆まだまだまだ寒さ厳しき候。風邪が流行っておりますが、皆さまには如何な日々でしょうか。

昨年末発行の予定でありました「同行」第七号をようやく皆さまの元にお届け出来ます。大変遅くなりましたことを深くお詫び致します。

☆冬期間、梅花研修に余念のない事と思えますが、新しく梅花を学びたい人を一人でも多く誘って、梅花の輪を更に広げて行きたいものです。

各自でガンバリましょう！